

連載「四字熟語の愉しみ」 web「円水社+」 <http://www.ensuisha.co.jp/plus/>

2019年7月の「四字熟語の愉しみ」は

「大腹便便」「一鼓作気」「魯魚亥豕」「決勝千里」

を書きました。

「大腹便便」(だいふくべんべん) 2019・07・03

便便は肥大しているようすで、下腹の出た中年男を揶揄する「大腹便便」の由来は、後漢時代の辺韶(孝先)という老師に対する弟子たちのからかい「辺孝先、腹便便」(『後漢書「辺韶伝」』)からのようです。辺韶は、腹には五経がつまっており、よく睡るのは孔子と同じように夢で周公に会って腹中の経論を談じているからだを切り返しています。後に大がつかしました。「大腹便便」の商賈といえは豊かさの表象です。安定期の唐代のでっぷり便便の玄宗にぽっちゃり美人の楊貴妃(60キロ+)はダイエット時代には現われないでしょう。

かつてサッカーファンを沸かせた有名選手が引退後に呑みすぎ食べすぎで「大腹便便」の中年男になっているといった個人の例ならまだしも、戦闘力を期待される軍人の「大腹便便」が指摘されています。アフガン戦線でビールを呑まなきややっていたらなかつたドイツ軍兵士。機械化で任務には支障がないとはいえ訓練を忌避する軍人の増大は米軍でも問題になっています。太めの軍人や警察官の「大腹便便」は戦闘のない平和の証なのですが。

「一鼓作気」(いっこさくき) 20190710

戦闘を開始するときに太鼓を撃って士気を盛り立てること。とくに最初の撃鼓で兵士の勇気を奮い立たせることが「一鼓作気」(『春秋左氏伝「莊公十年」』から)です。『左伝』によれば、春秋時代の243年間に各国で発生した戦闘は450余を数え、平均して一年に二度の戦闘が行われたこととなります。この時代の戦闘に参加したのは士以上の貴族で、平民は武器を所持せず貢物を納めるだけ。戦争は武力による敵軍の消滅が目標でした。

紀元前684年、三鼓まで打って侵攻してきた大国の斉軍に対して、満を持して士気をみなぎらせた弱小国の魯軍は、そこで初めて鼓を撃って戦端を開き、斉軍の撃退に成功しました。そのことから「一鼓作気」は先例として戦術に採り入れられました。

今日でも力をみなぎらせて一気にことを仕遂げてしまうことにいいですから、事例は多くみられます。身近な例では、甲子園の高校野球で選手の士気を鼓舞するために、応援席中央に陣取った太鼓を打って繰り広げられる応援合戦はスタンドの欠かせない情景です。

「魯魚亥豕」(ろぎょがいし) 20190717

漢字の字形が似ているために、写し誤ったり読みちがえたりすること。「魯」と「魚」また「亥」と「豕」は字形をまちがえやすいことから、合わせて「魯魚亥豕」(『紅樓夢「一二〇回」』など) といいます。「魯魚陶陰」や「魯魚帝虎」なども同じです。

孔子の弟子の子夏が衛国を過ぎた時のこと、史書を読む者がいて、「晋師三豕河を渉る」(晋軍と三匹の豕が河をわたる) というのを聞きました。三匹の豕が河をわたるとは何事? そこで子夏は「非なり、これ己亥なり」と正します。「己と三とは近く、豕と亥とは似ている」からで、三豕ではなく己亥の年であると指摘しました。調べたところそのとおりであったので衛国では子夏を聖としたといいます(『呂氏春秋「二二」』から)。

中国では日ごろの会話でも「それどの字?」としきりに確認します。日本にとって関心が深いのは、現存する版本『三国志・魏書「東夷伝倭人条」』の「邪馬壹國」の壹は伝写の過程での臺の誤写とし「邪馬臺國」と読むことを通説としていることでしょう。

「決勝千里」(けっしょうせんり) 20190724

千里も離れたところで戦略を立ててはるかな戦場で勝利を収めることを「決勝千里」(『史記「高祖本紀」』から) といいます。楚の項羽を倒して漢王朝の皇帝に推された劉邦は、都の洛陽に文武百官を集めて祝宴を開きます。その席で、みんなの前で臣下の三人(人中三傑)を褒めあげたのです。まずは帷幄(陣幕)の中にあって戦略を立て、千里先の戦場での勝利を見通せる張良(子房)にはかなわない。百姓を安んじ戦いのための糧道を絶たない蕭何にもかなわない。そして攻める城は必ず落とす韓信の用兵はわたしより勝れている。自分より勝れている三人を用いることができ天下がとれたのだと褒めあげたのです。成果を臣下の力とする大将もさすがなのです。

この「決勝千里」はのち羽扇輕搖の諸葛亮、唐の李世民や明の朱元璋にもいわれますが、現在は「国考申論」(国家公務員試験)の論文がこの「決勝千里」だというのは。課題の本質と特徴を的確に把握し国を治める要諦をまとめる能力がそれだということです。